

ブラジルとアルゼンチンの都市開発について

(「95南米東部地域及びアメリカ南部地区の都市環境の保全視察団報告Ⅰ」)

福 山 大 学 工 学 部 正 員 千 葉 利 晃
 建設省中国地方建設局 ○松村 邦則
 (株)エイトコンサルタント 山本 真人
 中国技術コンサルタント(株) 佐々並敏明

1. はじめに

都市開発における計画の理念がヨーロッパから始まり、その技法、考え方、事例等が多くの人達によって紹介されている。我が視察団は、ヨーロッパの歴史や文化を基調としたブラジルとアルゼンチンの主要都市の都市開発の現状や課題を学ぶとともに、1992年の地球サミット「リオ宣言」における持続可能な開発の一端をこれらの都市に見ることができればと思い、2週間の日程で視察したので、その概要を以下に報告する。

2. ブエノスアイレス市の都市の現状

アルゼンチンの首都「ブエノスアイレス」は、大西洋に注ぐラ・プラタ川の上流240Km内陸に位置し南米のパリと言われるだけあって、街並み、交通機関、通行人にいたるまでパリに似ている。事実、街を歩いてもその雰囲気はヨーロッパの街角と少しも変わらない。それもそのはずで人口の90%強がスペイン系イタリア系を中心とするヨーロッパ人種である。街は、縦・横とも100m単位で整然と区画され、所番地もそれぞれの区画毎に表示されていて、道路にも全てに名が付けられている。ブロックとブロックの角には交差する道路名と番号の標識があるので迷うことがない。大通りを除けば全ての道が一方通行となっている。メインストリートは、アルゼンチンの独立記念日にちなんで名付けられた7月9日通りが市の中心を南北に貫き、道路幅144mの世界一広い大通りである。1894年(明治27年)にこの大通りが開通した歴史を考えるとアルゼンチンの都市計画がいかに先進国であったかがうかがえる。東西に走るコリエンテス大通りとの交差点には街のシンボルとして高さ67mのオベリスク(ブエノスアイレス独立記念塔)がそびえている。また、サンマルチン広場から5月大通りまでの約1Kmの歩行者専用道路のフロリダ通りには約500軒を越す専門店が並ぶショッピング街となっている。

ブエノスアイレス市の新都市計画(1800年〜)に基づき整備された地下鉄(1913年開通、全長約65Km、63駅)は、5月広場を起点にA、B、D、Eの4路線が市内を西へ放射線状に走り、C線のみが他の4路線と接続し、南北の主要鉄道駅、南のコンスティーションと北のレティロを結んでいる。

都市の文化指標としての娯楽施設は、世界三大オペラ劇場の1つであるコロソ劇場をはじめとして、市内には劇場が約50軒、映画館は約250軒、美術館・博物館約100館、画廊約130館、世界三大公園のパレルモ公園などがある。

港湾は、アルゼンチン最大の港のブエノスアイレス港がラ・プラタ川(川幅45Km)に開かれ、世界の主要船舶が就航しているが、施設は一部老朽化しているものの、既存建築物のレンガ造りの素材を生かして再開発ニュータウンとして生まれ変わりつつある。また、ブエノス港に近接したボカ地区は、アルゼンチンタンゴの発祥地で、名曲「カミート＝小路」にちなんで名付けられた路地に立ち並ぶ家々は赤・黄・緑のけばけばしいペンキで塗られ独特の雰囲気がある街並みを形成している。



9 de Julio Avenue - Obelisco

写真-1 7月9日大通りオベリスク

3. ブエノスアイレス市（面積約2万ha、人口約300万人）の都市の課題と対策

市の第一の課題は、20年以上も人口が増えていないにも関わらず、近年の核家族化に伴い一人当たりの居住スペースが増大していることである。しかし、市域の殆どの地区が整然と区画割りされており、毎年約110万㎡の新たな居住地は建物の高層化が唯一の解決策となっている。このため、市は土地の管理計画を決定し、ブエノス港の再開発を行うとともに、新たに都市計画区域に含めて住居、業務地及び環境保護地として管理していくこととしている。第二の課題は、都市内の自動車交通250万台（市内発生70万台、周辺25市から市内へ80万台、通過100万台）の交通処理計画で、国及び周辺市との調整や新たな道路空間の確保が支障となっている。この現状に対し、抜本的な対策として写真-2 ブエノスアイレスの都市計画

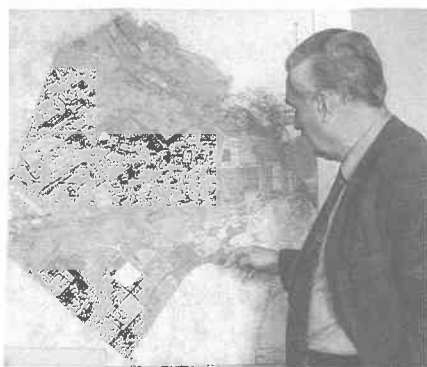


写真-2 ブエノスアイレスの都市計画
市境で密度の高い輸送機関で乗り換えるパーク・アンド・ライドシステムを世界銀行の融資を受けて事業化を予定している。また、当面の対策としては、道路拡幅、駐車場整備、リバーシブルレーンの運用及びバス専用路線の指定等が進められている。

4. サンパウロ市の巨大都市

市の西部のピニェイロス川岸の丘陵地に開かれたサンパウロ州立総合大学は、面積500haのキャンパスの規模、近代的設備から、名実ともブラジルの学問の殿堂となっている。学園内には循環バスが走り、園内道路の随所に自動車の速度低下を促すハンプやバス優先の非常停車帯等が設けられている。ちなみに園内を走っていた車はアルコール車（サトウキビ）で、ブラジルでは原油約60%に対し、残りは全てアルコール車。



写真-3 サンパウロ大学

5. サンパウロの海岸リゾート地サントス

サントスは古くからコーヒー貿易港として栄えているが、現在はサンパウロ市民のプライベートビーチとして利用されている。このため、海岸線は別荘化し、高層ビル群がひしめき合って立ち並んでいる。

リゾート都市としては、街の区画割りも整然としていてモンテ・ド・サラの小高い丘から眺める景色は、リオデジャネイロのコパカバーナ海岸やイパネマ海岸にも匹敵する眺めである。

しかし、海岸線から望む高層ビル群は、傾き、相互のビルでやっと支え合っているという状況で、これは細かい砂質層の上に十分な杭を打たずに建てたため地盤沈下が生じたものと思える。

6. おわりに

南米東部地域は、豊富な天然資源と大規模農業国としての経済的繁栄を背景に、ヨーロッパ文化を基礎とした都市開発を進め、美しい街並みの歴史的遺産や学術、芸術などの優れた文化的遺産を多く残している。これに対し我が国の社会資本整備は



精力的には進めてきたが、果して後世の人達へどれだけ自慢できるであろうか。今回の視察を契機に、技術者として優良な遺産を少しでも多く残すとともに、その遺産が将来の需要に対しても十分に応えられるものを造っていきたいと言うのが率直な感想である。